

わち水多水当人か、彼に随行した人物により、寛保二年頃調製されたのがこの図面ではないかと考察している。それが、どのような経過で天理圖書館蔵となったか不明であるけれども、ともかく、佐伯側から調製された図とは考えられないから、たとえ具取圖的なものであっても、特異な図面として、当時の佐伯城と城下町等を知る上で貴重な資料である。

(注一) 主図合結記 城郭図彙編の集成、(厚本として全国的に類本、異本が多い。従来山県大氣が明和年間城取の軍学を講じて右に記した城郭図彙編を収集し、死後弟子たちによつて編纂されたと伝えられていたが、今日では、彼が生前よりこの書が存在するところから、この説は否定され、現在のところ著作者は不明である。

昭和四十三年「日本城郭史料集(人物往來社)収録  
昭和四十九年「城郭圖譜、主図合結記(矢野一考編)」(名著出版社刊)がある。

(注二) 西遊雜記 幕府の内命を受けて隠密ではなかったかと考えられていた古川吉松軒が、天明三年西國を旅行した時の紀行文で、城郭や土地の形勢と、要点をつかんで書いている。とくに最下級の地方住民の生活描写が注目されている。

(注三) 廿二日 其の場に行つて視ること(大義和辞典)

(以上)

偶感

老 樹 礼 賛

会員 羽 柴 弘

老人福祉のことがかなり行き届いて、このところお車の寄の生活はかなり明るくなった。よいことである。

樹木の世界でも、名木・大樹が大切にされるようになって、昔からの天然記念物指定は言わずもがな、昨年米県

如市町村が、その調査や保護に努めている。これも結構なことである。僅かに残っている社寺の境内などの老樹を調べてまわり、指定保護しようとするものだが、このことは、とかく野放しになりがちで、地域間差に植づいてはいる格好である。

しかし県南地方には、これといつて特筆に価する樹木が少なく、肩身のせまい思いがする。僅かに二三の神社の森を思い出せるに過ぎない。国有林は青山の奥などにあるが、原生林と呼ぶには行程とおく、いさゝかさみしい思いがする。

初秋九月四日、私は姪女と共に東北の英彦山に登り、翌五日は守  
佐八幡の真宮神許山に登る機会を得た。

ある所に及ぶものがある。樹令三四百年と思われ大杉が何千本と文字とあり林立し、秋の陽は高く聳えたる幹を光らせている。傍仰の山とは異なる、よくもこんな大木にたはれていることに驚嘆した。春霧殿の前庭の老母は節くれた大きな枝を張り、樹高四十メートル、根まわり十二メートル、八百年と書かれてあった。

御許山日側の御許山騒動で勤皇軍のたてこもった山、宇佐神宮の元宮の社殿がある。境内家道の杉の老樹、その大きさは若者山に劣らない。歴史のしんがりに、社叢の雰囲気は、ちひさな私の文字でどのくらいもならない。粟登山道に沿う原生林に心をなされた、国有林である。

宇佐神宮の境内、神灰の社叢も、私の眼底から消えない。フツと林原八幡の大樟や、回東の櫻八幡の社叢を思い浮かべる。九月十日に訪れた戸次の楠木生(くすきう)の大樟も大きい。地をさするこの大樟があったことよつて生まれてくる。

これら特別なものに比べると、佐伯地方には、これといったおぼろしいものかきわめてすくない。

佐伯・南郡一帯は造林がすすみ、廣葉樹林が少なくなつて、杉の造林が谷はたから山の根までつづいている。それはよいとして、神社の森をはじめ、村里のあちこちに残っている由緒ある老樹・巨木をこの際見なおして、いつまでも保存愛護したい。それその老樹何百年の歴史を、敬虔な気持ちで尊重したいと思う。(おわり)